

介入する社会調査

遠藤英樹

はじめに

1. 社会調査における〈科学主義〉
2. 〈科学主義〉をこえて
3. 介入する社会調査

おわりに

はじめに

社会調査は、インタビューによるもの、参与観察によるもの、記録文書を分析するもの、手紙や日記を分析するもの、会話を分析するもの、質問紙調査によって得られた反応を分析するものなど多岐にわたっているが、それらは社会学の主要な認識形式となっている。

これら多岐にわたる認識形式を「社会調査」という一つの枠組みにまとめてあげていくには、長い道のりが必要であったが（佐藤 2000：98-103）、そのことを明確にするには社会調査史をテーマとして、より綿密に準備を行い豊富な資料にあたっていく必要があるだろう。本稿では、そういった問題には立ち入らず、これからの社会調査のあり方について問題提起していきたいと考えている。

これまで社会調査では、調査対象たる社会的現実を変容させてはならないとされてきた。調査者は、社会現象や社会的現実から超越した立場から、できる限り中立的・客観的に観察するべきだと考えられてきたのである。本稿ではまず、こうした〈科学主義〉的な社会調査観について概観していく。

しかしながら近年、こうした〈科学主義〉的な社会調査観に対して様々な疑問が投げかけられており、必ずしも〈科学主義〉的な社会調査観が妥当ではないことについて指摘する。現在では社会調査が社会現象や社会的現実をできるだけ正確に観察し写しとるものではなく、何らかの「物語」を織りあげているに過ぎないのだとする社会調査観や、「対話的構築主義」と言われる社会調査観が展開されているということについて述べる。

これらを踏まえた上で、「介入する社会調査」とも言うべき社会調査のあり方があり得るのではないかと指摘し、今後、そうしたあり方こそが重要となると結論づける。

1. 社会調査における〈科学主義〉

ワルター・ウォーラスによれば、我々がある事柄を「真」と述べる際には4つの方法があるという（Wallace 1971）。彼は以下のように言う。

経験的言辭の真理を見だし、検証するには、少なくとも4つの方法がある：それは、「権威的（authoritarian）方法」「神秘的（mystical）方法」「論理的・理性的（logico-rational）方法」「科学的（scientific）方法」の4つである。それらの方法の主要な違いは、どこにあるのだろうか。それは、真理の言辭を形成する者（すなわち、「誰がそう言うのか」）や、その言辭が形成される手続き（すな

わち、「いかにして知ることができたのか」) や、その言辞の効果 (すなわち、どんな違いをもたらしてくれるのか) といったことにおける信頼性をそれぞれの方法が付与する様式にある。(Wallace 1971: 11) ¹⁾

「権威的 (authoritarian) 方法」とは、年長者、政治家、教授といった知を正当化してくれる人びとの言葉に頼りつつ「真」であることを主張する方法であり、「神秘的 (mystical) 方法」とは、預言者や神といった存在を信じることで「真理」を形成していく方法である。また「論理的・理性的 (logico-rational) 方法」とは、論理的な手続きにのっとって言葉が述べられているか否かで「真」であることを判定していく方法である。最後に「科学的 (scientific) 方法」とは、調査や観察が「真」であることの重要な根拠となるものである。

このように社会調査が「科学的 (scientific) 方法」に分類されるとする考え方を、ここでは<科学主義>と呼ぶことにしよう。こうした<科学主義>は以下のような点を非常に重視している (土田 1994: 1-5)。

第一に現実・現象を「説明」できるということである。つまり「なぜ」という問いに対する根拠や理由を明瞭にできなくてはならないのである。もちろん単に「なぜ」という問いに対する根拠や理由を明瞭するだけではなく、①その説明自体に矛盾が含まれてはならず (内的妥当性)、②説明と現実が食い違っておらず (外的妥当性)、③測定するたびに同じ結果が得られるものでなくてはならない (信頼性)。

第二に現実・現象を「予測」できるということを必要とする。「なぜ」という問いに対する根拠や理由を用いて予測を立てた場合に、その予測が一定の確率で的中しなくてはならないとされているのだ。

第三に現実、現象を「操作 (コントロール)」できることが重視されている。科学的真実であるためには、その説明から導かれてきた予測にもとづいて、現実・現象を操作 (コントロール) できなくてはならないとされているのである。

第四に、以上のような「説明」「予測」「操作」が、すべて言語で表現されていることが必要とされる。科学的に真実であるためには、それが言語で表現されていなければならない。科学の世界では、真実はすべて言語で表現されている必要があるのだ。逆に言えば、言語で表現されていない現象は科学では取り扱えないということになる。

<科学主義>は以上の点を重視しながら、社会調査を「科学的」であると主張する。こうして<科学主義>においては、素朴な自然科学観と同様²⁾、調査者は中立的な立場にたつて客観的に社会現象や社会的現実を見つめていくことが可能であるし、またそうすべきだとされる。

2. <科学主義>をこえて

しかしながら社会調査は果たして、<科学主義>が考えるようなものなのであろうか。こうした問いが近年、様々に投げかけられている。以下では、そのいくつかについて見ていくことにしよう。

たとえば盛山 (2005) は、質問紙調査等の量的な調査であれ、インタビューや参与観察といった質的な調査であれ、社会調査の目的は社会現象や社会的現実をできるだけ正確に観察し写しとることにあるのではないと主張する³⁾。そうではなく社会調査は実は、何らかの「物語」を織りあげているに過ぎないのだと彼は言う。

彼は「物語」を、「時間に沿って生起していくさまざまな出来事 (事象) が、意味的に関連あるような仕方で配置され陳述されることによって、ある世界を有意味で秩序あるものとして見せていくような語り」だと定義する (盛山 2005: 12)。その上で社会調査もまた、社会現象や社会的現実を「意味的に関

連あるような仕方で配置」し、「有意味で秩序あるものとして見せていく」ために行われる「語り」に他ならないと主張する。

盛山は、E. デュルケームの『自殺論』を例に挙げているが、これはよく知られているように、「19世紀のヨーロッパ各地の自殺統計データを駆使して、自己本位的自殺、集団本位的自殺、アノミー的自殺などの概念を提示し、自殺というきわめて個人的で私的ともいえる現象の背後に、集合精神という社会的なものを発見したとされる研究である」（盛山 2004：4）。

しかし『自殺論』を注意深く読んでいくならば、統計データを処理し観察する際にも、決して中立的で客観的な立場で行われているのではなく、＜自殺というきわめて個人的で私的ともいえる現象の背後に、集合精神という社会的なものが存在する＞というデュルケーム自身の語り口調が最初から色濃く貫かれていることに気づくであろう。それはまさに、観察という形式をとった「物語」に他ならないのではないか。

このように社会調査もまた一つの「物語」に過ぎないという考え方は、遠藤（2006）にも見受けられる。社会調査は、インタビューによるもの、参与観察によるもの、記録文書を分析するもの、手紙や日記を分析するもの、会話を分析するもの、質問紙調査によって得られた反応を分析するものなど多岐にわたっているが、それらが社会学の主要な認識形式となっていることを確認した上で、これら社会調査が一つの「語り」に他ならないと主張する。遠藤は以下のように述べている。

インタビューや参与観察だけが「語り」ではなく、質問紙調査もまた同様である。質問紙調査とは質問紙に対する人びとの反応をデータとするものだが、そうして得られた反応も一つの「語り」に他ならない。多くの場合それは数値で表されるが、数値という形であれ、言葉という形であれ、あるいは身振りや映像という形であれ、どんな形であれ、一つの「語り」であることに変わりはないだろう。このように社会調査が一つの「語り」であるならば、社会調査によって得られたデータ（語られたもの）も、社会の何らかの相貌を生みだしてしまう「解釈」を既に内包していることになるだろう。データ（語られたもの）は、研究者の視点と共鳴し社会というテキストを織りあげることになるのだ。どのような言葉がすくいあげられ、それがどのような視点から分析されるのか、これが社会的リアリティの意味までも変えてしまうことになる。質問紙調査においても、どのような質問が行なわれることで、どのような数値がデータとして拾いあげられ、それがどのような統計的手法によって分析されるのかによって、描きだされる社会のあり方は大きく変わってしまうのである。それゆえ社会調査においても、誰が、どの視点から、何のために、いつ、どこで、いかに語るのかといった「語り方」あるいは「解釈の仕方」を問うことが要求されるのだ。その意味で社会調査は、何らかの社会性・制度性・政治性を帯びざるをえないと言えよう。（遠藤 2006：46-47）

このように考えてくると、**社会調査は社会現象や社会的現実を客観的に写しとる「透明な鏡」ではなく、それ自体がある位相のリアリティを生みだしてしまうものなのである**と言える。それは、＜科学主義＞が想定した社会調査のすがたとは異なるものではないか。

桜井（2002）も社会調査に対する立場を「実証主義」「解釈的客観主義」「対話的構築主義」の3つに分類し、こうした問いを投げかけている（桜井 2002：16-31、好井 2006：129-133）。桜井が言う「**実証主義**」とは、本論文が述べる＜科学主義＞に近い立場である。こうした立場に立てば、社会現象や社会的現実を「透明な鏡」のごとく中立的・客観的に正確に写しとることが、社会調査や観察の目的となる。

「**解釈的客観主義**」とは、人びとの語る解釈を重ねていくことで、できるだけ客観的な「事実」に到達しようとする立場である⁴⁾。たとえばインタビューなどで地域の商店街で暮らしてきた人びとの想いを聞

きとったとしても人びとが語ることに微妙なズレが存在する。そのままでは、地域の商店街のすがたを客観的に再現することはできない。そこで、できるだけ多くの人びとにインタビューを重ねることで、ある共通した人びとの語りを見つけ出していき、そこから地域の商店街のすがたを浮彫りにしていこうとする立場が「解釈的客観主義」である。

しかし桜井は、これらに対して「対話的構築主義」という立場を主張し、私たち調査者が社会現象や社会的現実から距離をとって、中立的・客観的に観察することなど不可能だと言う。たとえばインタビューにおいても、私たちは調査対象者たちと関わることで、彼らに影響を与えたり、彼らから影響を与えられていたりする。そうした中でインタビューは行われるのだとすれば、すでにそれは中立的・客観的なデータというよりも、調査者が調査対象者との共犯関係のなかで構築したものであると言わねばならない⁵⁾。桜井は、その点についてより自覚的に調査を行うべきだと主張するのだ。

3. 介入する社会調査

観察者は、決して中立的・客観的な立場から調査を展開するわけではない。調査にあっては、観察者自身の語り口調が色濃く貫かれており、その意味で社会調査とは、何らかの「物語」を織りあげているに過ぎない。そのため社会調査においては、誰が、どの視点から、何のために、いつ、どこで、いかに語るのかといった「語り方」あるいは「解釈の仕方」を問うことがつねに要求される。

それだけではない。調査者は社会現象や社会的現実から超越したポジションに立脚することは決してできないため、彼らは調査対象者との共犯関係のなかでデータを構築していく（対話的構築主義）。

このように社会調査は、社会現象や社会的現実を正確に観察し写しとるものでは決してないのである。以下では、前章で見た社会調査に対するこうした考え方を踏まえつつ、これらをさらに進め、「介入する社会調査」という社会調査のあり方を提唱してみたい。

「介入する社会調査」とは、次の2つについて積極的な介入をはかっている調査のあり方を言う。

一つは「データに対する介入」である。このあり方においては、調査データは調査者と調査対象者との共犯関係のなかで構築されるものであることを自覚的に引き受けつつ、これを否定的にとらえるのではなく、むしろ積極的に前景化していこうとするのである。もちろん、こうしたデータはいわゆる「客観的」なものとはならないかもしれない。当然そこには、様々な社会性・制度性・政治性が介在することになる。私たち研究者が、どのような視点から、何のために、いつ、どこで、何に向けて、いかにして調査対象者との相互作用においてデータを構築していくのか。こうしたことを、常に問い続けていく必要が生じるであろう。

もう一つは「社会的現実に対する介入」である。これまで社会調査では、調査対象となった社会的現実には介入し、社会的現実を変容させてしまうことは厳しく禁じられてきた。しかし調査者は、社会現象や社会的現実から超越したポジションに立脚することは決してできない。そうだとするならば、調査者はむしろ社会的現実に対して応答責任（responsibility）を負い、それら社会的現実への介入を積極的に行っていくべきではないだろうか⁶⁾。調査という営みを通して社会的現実を変容させていくことについて、より真剣に考えていくべきではないか。

このように「データに対する介入」および「社会的現実に対する介入」を積極的に行っている調査のあり方を、ここでは「介入する社会調査」と呼んでいる。筆者は現在、こうした「介入する社会調査」を推し進めていこうと考えている。たとえば地域づくりの様々な活動に対して介入していこうという試みを様々に行っているが、その一つに「親子で楽しむデッサン能」という地域づくり活動に対する

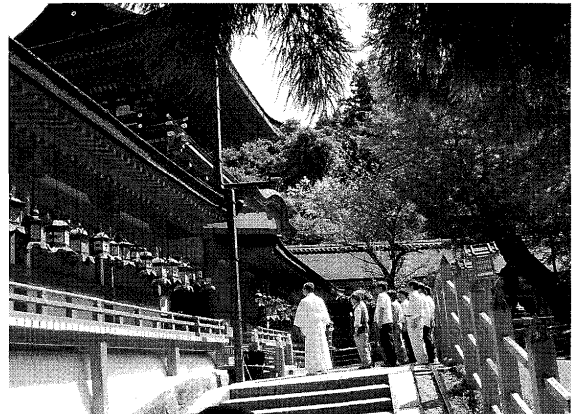
介入がある。

「親子で楽しむデッサン能」とは、毎年行われている、奈良県内にあるまちづくりNPO団体「宙塾」が主催する地域づくり活動である⁷⁾。これは、能にゆかりの地を訪ね、能を素描的に（デッサン風に）興味をひくような部分を選んで楽しむというツアーである。午前10時頃に、奈良県春日大社の「一の鳥居」という場所に集合する（写真1）。全員集まった後、能にゆかりの地を訪問していく。

毎年よくツアー地に組み込まれるのは、「影向の松」「お旅所」「春日大社」等である（写真2）。「影向の松」は能舞台の背景によく描かれている松のモデルだとされているもので、今は古い松の切り株しか残っていない。「お旅所」は、能を春日大社に奉納する舞台となっている場所で、芝が一面に広がっており、この芝の上に居て能を観ることから「芝居」という言葉がつけられたという場所である（写真3）。ここは、普段は木の柵で閉ざされており、その柵を「埒」と言い、そこから「埒があかない」という言葉が用



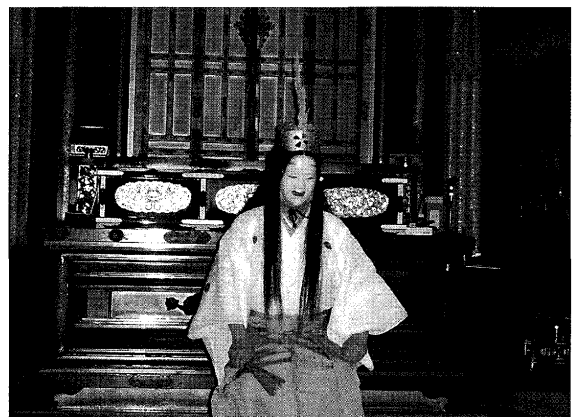
<写真1：奈良県春日大社の「一の鳥居」前に集合する人たち>



<写真2：「春日大社」への参拝>



<写真3：「親子で楽しむデッサン能」で訪れる「お旅所」>



<写真4：能の一場面>



<写真5：「親子で楽しむデッサン能」におけるワークショップ風景>

いられるようになったらしい。

このように奈良という地域が能と非常にゆかりが深いことについて学びながら、地域の良さを発見していく。昼食後は、能楽者から能の話を聞き、能体験をしつつ、演目について興味深い箇所だけをピックアップし鑑賞する(写真4)。これらがすべて終了した後、奈良の魅力を語るワークショップが行われることになっている(写真5)。

調査は、最後のワークショップにおいて実施されている。調査においては、今回のツアーで楽しかった点や良かった点、さらには奈良という地域が今後進むべき方向性などについて質問される。その際、調査者は調査対象者であるツアー参加者と積極的にコミュニケーションをはかり、能を鑑賞するポイントや奈良という地域を楽しむポイントについて語りかけつつ、「データに対する介入」を積極的に行っていく。そうすることで奈良という地域を、いかにして守り育てていくべきなのかという問題意識を調査対象者に明確に持ってもらうと考えているのだ。

また、そのことを通して、彼らの意見を積極的に今後のまちづくり活動に反映させていこうと考えており、それに向けたブログやホームページの構築もすすめている。その意味で「社会的現実に対する介入」も行い、地域づくり活動を育成するための中核として、調査という営みを位置づけ、調査研究にとどまらず実践的にも社会的現実と関わろうとしているのである。

おわりに

以上、「親子で楽しむデッサン能」において実施されている社会調査を事例に、「介入する社会調査」について考察してきた。こうした社会調査にあっては、「データに対する介入」や「社会的現実に対する介入」を積極的に行っており、その点で従来の社会調査のあり方、特に<科学主義>的な社会調査のあり方とはかなり異なったものになっていることを見てきた。

「介入する社会調査」では、調査対象たる社会的現実を積極的に変容させようとし、むしろ、そうした社会的現実に対する応答責任(responsibility)を強調する。また調査者は中立的・客観的に社会現象や社会的現実を観察するのではなく、調査対象者とのコミュニケーションを通じてデータにも介入していくとされていた。

こうした社会調査のあり方が果たして、どこまで妥当であるのか。これについては、もう少し冷静に検討し続けていく必要があるだろう。しかしながら、「介入する社会調査」は社会調査のあり方において、私たちが今後考えていくべき問題を様々な形で提起しているのではないだろうか。

【注】

- 1) この部分の引用については、筆者が訳出した。
- 2) かなり以前から、物理学をはじめとする自然科学においても、調査者は現象から超越的なポジションに立って、中立的・客観的に観察することが不可能であることが指摘されていたはずである。そのためここでは、あえて「素朴な」自然科学観と述べていることに注意してもらいたい。
- 3) 本稿では、「質的調査」と「量的調査」を特に区分していない。インタビュー、参与観察、質問紙調査といった調査形式には様々な違いがあり、そうした違いをふまえた上で調査を実施していく必要があることは言うまでもない。しかし、そのことは「質的調査」「量的調査」というカテゴリーによって調査法を分類することが妥当であるか否かという問題とは次元を異にする。「質的調査」「量的調査」というカテゴリーによって調査法を分類することは、社会調査を学ぶ上では調査法に関わる諸概念を整理するものとして有効である。だが、それをこえて調査のあり方を考察していく必要が研究者にはあるだろう。こうした指摘は、社会学を専門にする研究者にとって特

に新しいものではない（たとえば、Brewer and Hunter 1989、Denzin 1989、佐藤 1992、盛山 2004等を参照してもらいたい）。

- 4) 「解釈的客観主義」の立場をとるものとして、D. ベルトー (Bertaux) の研究がある (Bertaux 1997=2003)。またグラウンデッド・セオリー・アプローチによる諸研究も、この立場に属するものであると言えよう (戈木クレイグヒル 2006、木下 1999)。
- 5) 調査に際して調査者と調査対象者との相互作用に注目すべきことを指摘した研究として、他に圓田 (2001)、宮内 (2005)、Kleinman and Copp (1993=2006) 等を参照。圓田 (2001) は援助交際を行う少女たちのインタビューを通して、調査者とのインタビューが彼女たち援助交際の少女たちにとって自己の想いを表出する一つのカタシノの場になっていたり、新たな知識を獲得する場になっていたりすることを指摘している。また宮内 (2005) は、調査者は中立的にデータに向き合うというよりも、インタビューといった調査行為を通して調査対象者と恋愛関係に入り込む場合があることを述べている。クライマン&コップ (1993=2006) は、これら調査者と調査対象者との相互作用において生じてくる「感情」が調査という行為において重要な役割を演じていることを指摘している (Kleinman and Copp 1993=2006)。
- 6) 私たちは誰一人として社会的現実から超越的なポジションに立つことなどできない。私たちのすべてが、社会的現実に対して応答責任 (responsibility) を負っているはずである。研究者も同様であり、調査は、社会的現実に関与しないための免罪符には決してなり得ない。調査者は社会的現実生きる人びとの、単なる一員に過ぎないのであって、「真」であることに対する何の特権も持っていない。観光社会学や観光人類学は、このことを自覚的に引き受けようとしており、多くの重要な指摘をこれまでにしてきた。たとえば、E.ブルーナーが指摘するように、観光客と調査者を区別するものは何もない (Bruner 1995)。調査をするという行為は観光するという行為と何ら変わらないのである。むしろ調査者を含め研究者は、その都度、その都度、社会の内部において観光客をはじめ、研究者以外の人びとと知の覇権 (ヘゲモニー) を争っていかなくてはならないはずである。
- 7) NPO団体「宙塾」代表の黒飛啓氏およびスタッフの方々には、大変お世話になった。彼らの協力がなければ、本稿を完成させることはできなかった。この場を借りて、深くお礼を申し上げたい。

【参考文献】

- Babbie, E. (2001). *The Practice of Social Research, 9th ed.* Wadsworth Publishing Company. 渡辺聰子監訳 (2003) 『社会調査法1——基礎と準備編』東京：培風館
- Bertaux, D. (1997). *Les Recits de Vie: Perspective Ethnosociologique.* Paris: Nathan. 小林多寿子訳 (2003) 『ライフストーリー——エスノ社会学的パースペクティブ』京都：ミネルヴァ書房
- Brewer, J. and A. Hunter (1989). *Multimethod Research: A Synthesis of Styles.* California: Sage Publications.
- Bruner, E.M. (1995). "The Ethnographer / Tourist in Indonesia". Lanfant M-F., J.B. Allcock and E.M. Bruner eds. *International Tourism: Identity and Change.* (pp.224-241) California: Sage Publications.
- Denzin, N.K. (1989). *The Research Act, 3rd ed.* New Jersey: Prentice-Hall, Inc.
- (1997). *Interpretive Ethnography: Ethnographic Practices for the 21st Century.* California: Sage Publications.
- Denzin, N.K. and Y.S. Lincoln (2000). *Handbook of Qualitative Research, 2nd ed.* California: Sage Publications. 平山満義監訳 (2006) 『質的研究ハンドブック1巻・2巻・3巻』京都：北大路書房
- 遠藤英樹 (2006) 『『テキストとしての社会』が交差する空間』『奈良県立大学研究季報』第16巻第3・4合併号、pp.45-51
- Holstein, J.A. and J.F. Gubrium (1995). *The Active Interview.* London: Sage Publications. 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳 (2004) 『アクティブ・インタビュー——相互行為としての社会調査』東京：せりか書房

- 宝月誠・中道實・田中滋・中野正大 (1989) 『社会調査』 東京：有斐閣
- 井上真編 (2006) 『躍動するフィールドワーク——研究と実践をつなぐ』 京都：世界思想社
- 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——質的実証研究の再生』 東京：弘文堂
- Kleiman, S. and M.A. Copp (1993). *Emotions and Fieldwork*. California: Sage Publications. 鎌田大資・寺岡伸悟訳 (2006) 『感情とフィールドワーク』 京都：世界思想社
- Lee, A. and C. Poynton ed. (2000). *Culture and Text: Discourse and Methodology in Social Research and Cultural Studies*. Maryland: Rowman and Littlefield Publishers.
- 圓田浩二 (2001) 「カタルシスと知的創造のインタビュー——方法論的考察」『社会学評論』 52 (1)、pp.102-117
- 宮内洋 (2005) 『体験と経験のフィールドワーク』 京都：北大路書房
- 戈木クレイグヒル滋子 (2006) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——理論を生みだすまで』 東京：新曜社
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』 東京：せりか書房
- 桜井厚・小林多寿子 (2005) 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』 東京：せりか書房
- 佐藤郁哉 (1992) 『フィールドワーク——書を持って街へ出よう』 東京：新曜社
- 佐藤健二 (2000) 「社会調査はどのような歴史をたどってきたか？」大澤真幸 (編) 『社会学の知33』 (pp.98-103) 東京：新書館
- 盛山和夫 (2004) 『社会調査法入門』 東京：有斐閣
- (2005) 「説明と物語——社会調査は何をめざすべきか」『先端社会研究』 第2号、pp.1-25
- Shutt R. K. (1999). *Investigating the Social World: The Process and Practice of Research*. California: Sage Publications.
- 土田昭司 (1994) 『社会調査のためのデータ分析入門——実証科学への招待』 東京：有斐閣
- Wallace, W.L. (1971). *The Logic of Science in Sociology*. New York: Aldine de Gruyter.
- 好井裕明 (2006) 『「あたりまえ」を疑う社会学——質的調査のセンス』 東京：光文社新書